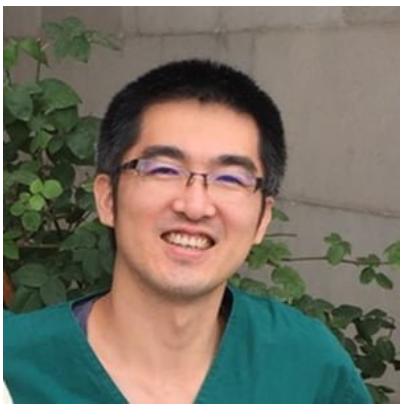
現地で活動した国際要員の声

紛争×外科医



外科医　杉本　卓哉

最新の派遣先：ナイジェリア（ICRC）

プロフィール紹介

高知県生まれ。熊本赤十字病院勤務。

派遣歴：南スーダン（2015年、2018～2019年）、イラク（2017年）、バングラデシュ（2018年）、ナイジェリア（2019～2020年）

国際要員を目指したきっかけ

小学生の頃、国語の教科書を通して、アンリ・デュナンの生涯を知り、赤十字の活動についても何となく知る機会がありました。中学生の時には、新聞で「インドの子どもは5歳から働き始める」という記事を読み、「自分ができることがあればしてみたい」と漠然と思うようになっていました。医師になりたての頃は、まだ自分がどのように貢献できるか、「外科」をどう活かしていけるか、見当もついていませんでしたが、縁あって熊本赤十字病院で働き始めてからジュネーブで開催された「戦傷外科セミナー」に参加し、外科医として貢献できる新たな道があると知ったことで、海外派遣を本格的に目指すことになったんです。

国際要員として登録されるまでの道のり

派遣されるまでには、専門性を高め、幅を広げることが必要でした。私は主に腹部外科医ですが、海外では外科全般を担わなければなりません。例えば、整形外科や産婦人科、その他形成外科などです。これらの「いろは」を理解するため、いろいろな科の手術を見学したり、異動させてもらいました。また、語学力は短期間では身につきませんので、日頃から英語を勉強するようにしていました。職場の理解も重要です。派遣の回数を重ねる度に、同僚への感謝の気持ちは強くなります。派遣中、私の分まで働いてもらっていますので、日本で働いている間、恩返しをしたいと思っています。

現地での活動のやりがいは？

まず第一に、災害や紛争の犠牲者のために自分の技術を役立てられる点にあります。派遣の任期は短く、私一人ができることには限りがありますが、事業が続いていくことでより多くの人のためになると感じています。ただ、患者さんが元気になって退院することは喜ばしいですが、紛争地では彼らを過酷な環境

に送り返さなければなりません。そんな状況を前に、世の中が少しでも良くなってほしいという気持ちは一層、強くなっていきます。第二に、各国から派遣されるメンバーと働くことで大きな刺激を受けます。これまで一緒に働いたことがあるメンバーと別の国のミッションで再会できることも嬉しいですね。

今後の目標

派遣の度に新しい発見があり、勉強しなければならないことが出てきます。日本での日常業務を通してそれらの課題を乗り越え、派遣先でさらに役に立てるよう努めていきたいです。また、英語圏だけでなくフランス語圏でも働くことができるよう語学にも磨きをかけたいと思っています。あと、自分が経験したことを病院内やコミュニティー内に発信していくことも今後の目標です。多くの人に状況や活動を知ってもらい、興味を持ってもらうことで、現地の人のためにつながると考えています。

関連記事

- 紛争の中医療を届ける-ナイジェリアに医師を派遣-（2020年2月19日）